
碓知盛 ～義経千本桜より～

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碓知盛 義経千本桜より

【Nコード】

N5708H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

兄源頼朝に追われ落ち延びる源義経。その中で立ち寄った宿にいたのは平家の残党平知盛、彼はここで義経を討とうとするが。歌舞伎の名作義経千本桜の場面の一つです、知盛がとても可哀想です。

第一章

碓知盛 義経千本桜より

これが源氏の因果であろうか。源九郎判官義経は実の兄である源頼朝と敵対することになってしまい彼から追っ手を差し向けられることになった。

まずは鎌倉の頼朝の下へ届けられた平家の武将である平知盛達の首が偽者であったことにはじまった。頼朝はこれを義経が平時忠の養女である卿の君を妻にしていることから彼が平家を庇ったのだとみなしたのである。

悪いことは重なりこの時に義経が後白河法皇から拝借された初音の鼓には実は頼朝を討つようにとの言葉が込められていたのである。こうしたことが重なり卿の君は自害し義経も都を落ち延びることになってしまった。都を後にした彼は僅かな家臣達と共に九州に向かう。そしてその途中で摂津大物浦に着いたのだった。

「この店の主は実は兄上になびかぬのです」

大物浦に入ったところで常に義経の側に控えている大男が彼に告げてきた。この厳しい顔をした僧兵の姿の男こそが武蔵坊弁慶である。涼しげな顔立ちの美男子であり身体自体は細い義経とは正反對の外見でありその心はまさに忠義一徹として知られている。

「ですから頼りになります」

「そうか。兄上にか」

「御言葉ですが頼朝公はあまりに因果が多うございます」

弁慶はここではまず言葉を控えめに出した。彼等の左手には青い海が広がっている。かつて彼等が平家を追い落としたその海である。

「ですから。人によっては」

「そしてそれは私もだな」

義経はここで寂しい顔を見せて言うのだった。

「それはな」

「いえ、それは違います」

弁慶はその寂しい顔になった主に対してすぐに告げた。

「義経様は悪くはございませぬ。ただ運命がそうさせているだけなのです」

「運命がか」

「左様です」

彼はおう言って主を慰めるのだった。

「ですから御気になさらずに」

「うむ、左様か」

「まずは何はともあれ九州まで落ち延びましょう」

弁慶は今はこれを勧めるのみだった。

「そうして時が来るのを待ちましょう。疑いが晴れるその時を」

「そうだな」

彼には野心はなかった。兄にそれを疑われていると思っていたのだ。だが実際はそうではなかった。猜疑心の深い頼朝は義経が自分の座である源氏の棟梁としての座を狙っていると思っていたのである。そしてそれにより彼を肅清してしまおうとしていたのだ。だが政治の世界に生きていなかった彼はそのことを知らないのだった。これはまさに悲劇であった。

そうしたことを知らぬ義経であったが何はともあれその店に辿り着いた。店の名は渡海屋といいます。まず一行を出迎えたのは店の主である銀平という男である。

「お話はわかっています」

彼は身分を隠している筈の義経達の姿を見てすぐに言ったのである。

「都から西国に落ちられるのですね」

「それはそうですが」

「何、私のことはもうそちらの方から御聞きしている筈です」

彼は明るく笑って弁慶を見つつ言うのだった。

「まあそういう事情で。それに貴方は天下の名将」

今度は義経に対して言うのだった。

「それをむざむざ失ってはいけません。ここは私にお任せ下さい」
「かたじけない。それでは」

「貴方を頼朝公に討たせることはしません」

見れば気品がありそのうえ闊達な表情である。顔立ちも悪くなくよく日に焼けている。そのうえ身体つきも非常にいいものであった。義経は匿われその部屋に入ったところで弁慶に対して話すのだった。

「あの主だが」

「銀平殿ですか」

「うむ。随分と気品のある御仁だな」

彼は銀平のそうしたところをすぐに見抜いたのである。

「ただの店の主とは思えぬまでにな」

「確かに侠気のある方です」

弁慶はまず主にこう述べた。匿われたといってもまだ安心してはいなかった。

「ですが気品もですか」

「そう、それがある」

彼はまた銀平に対して話した。

「かなりな。まるで宮中におられたかのように」

「それは気のせいではないですか？」

「幾ら何でもそこまでは」

弁慶以外の家臣達はそれは否定するのだった。

「確かに立派な方ですが」

「それでも」

「私の気のせいかな」

義経は彼等の言葉を受けてこう考えなおした。

「それでは」

「そうです。何はともあれ今は落ち延びることを考えましょう」
「九州まで」

「うむ、そうだな」

何はともあれまずはそれであった。彼等は何はともあれ九州に落ちようと考えていた。そうして銀平ともその際に使う舟のことを話していたのだが数日後であった。店のおかみが義経のところに来て言うのだった。

「鎌倉の追っ手が迫っているそうです」

「何っ、もうなのか」

「はい」

おかみは義経達の部屋を見て告げていた。

第二章

「その通りです。ですからすぐにここをお発ち下さい」

「しかし」

だがここで義経は窓を見る。開かれた窓からは雨が見える。しかもかなり激しい雨であり風まであった。その為海は途方もなく荒れていた。

「この空と海ではそれは」

「御心配には及びません」

しかしおかみはその彼に対して言うのだった。

「空や海を見るのも船問屋の仕事です」

「それはそうですが」

「うちの人を信じて下さい」

おかみの言葉がここで真摯なものになった。

「必ず。悪いようにはなりませんから」

「そうか。そこまでな」

「はい、そうです」

真剣な顔である。しかしその顔も何処か妙であった。

ただの船問屋のおかみにしてはあまりに気品があるのだ。義経は彼女についてもそれを察していた。しかしそれも今は言わなかった。そのうえで彼女の言葉を受けたのだ。

「ですからすぐに」

「随分世話になったな」

「いえ、それではすぐに御用意を」

義経達にこう告げて部屋を後にする。そうして店の廊下を進む彼女のところに一人の小さな子供が来るのだった。見れば十歳程の可愛い女の子である。

「典侍」

「その名前ではありません」

その女の子が呼んだ名前を厳しい声で打ち消すのだった。

「私は今はおっ母さんではないですか」

「母上ではなくてだな」

「そうです。私はおっ母さんです」

あくまでこう呼ばせるのだった。

「宜しいですね」

「わかった。それで知盛、いやお父つつあんは」

「仕度が遅いねえ」

おかみは女の子を抱きながら演じて言うのだった。

「義経様達はもうすぐ船に乗られるというのに」

「そうだね」

そんな話をしていると二人のすぐ側の障子に人影が出て来た。そうしてその障子が開いた時そこから大鎧に身を包んだ銀平が出て来たのだった。

「帝、お喜び下さい」

彼はまずその女の子の前に控え告げてきた。

「遂に時が来ました」

「時が？」

「そうです、かつて壇ノ浦で我等が敗れた時」

あの平家が滅亡した戦いである。その時に安徳帝は入水されたとなっている。だがここで彼は何故か目の前の娘に対して控えそうして帝と呼んだのである。

「帝は入水されたと偽りましたが」

「あの時のことであるか」

娘の言葉も何故かここで変わった。幼いながら威厳に満ちたものになっていた。

「あの時は恐れ多くも帝を我が娘と仕立てそして」

「はい」

おかみが彼の言葉に頷くのだった。

「乳母である私を妻として」

「そのうえでこの知盛がお匿いしておりましたが」

「そのこと、まことに有り難きことであつた」

見れば娘は男であつた。よく見なければわからないものであつたが。

「知盛、礼を言うぞ」

「有り難き御言葉。そしてです」

銀平、いや平知盛は今度はその乳母に対して顔を向けて話した。

「典侍局殿」

「はい、そうなのです」

「そうです。念願が叶い今夜遂に討ち果たせます」

真剣でかつ晴れ渡った顔になっていた。

「源義経を。屋島以来の怨敵を」

「何という奇貨。これぞ御加護でしょうか」

「おそらくは。この嵐です」

外からはその雨と風の音が止まない。到底並の者ならば出ることすらできない有様である。実は知盛もそれはわかっているのである。

第三章

「義経達は私の言葉を信じ海に出ます」

「そしてそこです」

「その通り、私と家来達もまた海に出ます」

だからこそ今鎧を着ているのである。戦う為にだ。

「そして平家の亡霊として彼等に襲い掛かるつもりですが」

「御武運を御祈りしております」

「本来ならば堂々と向かいたいです」

それが武士の本懐である。平家きつての名将と謳われた彼にとつてはそれこそが何よりの望みであった。しかしそれができていれば、その昔にしていることでもあった。

「ですが今の我等は」

「そうですね。死んだことになっている身」

平家は滅んだ、だからである。つまり今の彼等は生きているが死んでいる、死んでいるが生きている、そうした曖昧な世界にいるのである。

「亡霊そのものです」

「その通りです。これは致し方のないこと」

そしてそれを受け入れるしかないのであった。

「ですがそれでも参りますので」

「はい」

「そして戦は時の運」

知盛は今度はこのことを局に話した。

「若し海の篝火が一斉に消えた時は私が死んだと思って下さい」

「その時はですね」

「そうです。その時は私が討ち死にしたと」

言葉には覚悟があった。やはり彼は戦うつもりでありそこでの死を見ているのだった。やはりこれも彼が武士ならばこそであった。

「そう心得て下さい」

「わかりました。その時はです」

局も覚悟を決めたはつきりとした言葉で返す。

「私もまた」

「それでは」

こうして知盛は帝に一礼しそのうえで海に向かった。夜の嵐の海の中で早速激しい戦いはじまる。局は岸壁から帝を抱き締めつつその戦を見ていた。

「局、知盛は？」

「御安心下さい」

じっと海の篝火を見つつ幼い帝の御言葉に応えていた。岸壁の下から海だ。周りには何処までも強くそして激しい風の音が聞こえている。雨こそ止んだが風は強いままだ。

「知盛様は勝たれます」

「そうだ、そうであるな」

帝は局の言葉に確かな声で頷かれた。

「知盛ならばな」

「ですからここで。知盛様をお待ちしましょう」

「うむ」

二人はじっと戦の流れを見ていた。今は篝火が煌々と照っていた。その中で剣と剣が打ち合う音、それに喚声が起こっていた。しかしそうした音すらも掻き消してしまうような凄まじい突風が突如として起き。局が帝をその風から我が身で守ったその瞬間にだった。

「あっ！」

「どうしたのだ？」

「篝火が」

今海の篝火が全で一斉に消えてしまったのである。

「消えた………それでは」

局は知盛の言葉を思い出した。篝火が一斉に消えたならば。それはもう言うまでもなかった。

「帝、最早これまでです」

「知盛は敗れたのだな」

「左様です。こうなっては全ては終わりました」

帝を抱き締めながら応えていた。

「これでもう」

「局……」

そのまま帝を抱いて海に飛び込もうとする。しかしその時であった。

「おのれ、何という風だ」

知盛は今の風に齒噛みしていた。彼は海の上にいた。その一艘の舟に乗り戦っていた。彼は無事であったのだ。

「篝火が。これでは」

「帝が誤解されますな」

「その通りだ、ここは暫し待て」

戦の場を家臣達に任せることにしたのだった。

「局様が思い違いをされていればことだ。見てくる」

「わかりました、ではここは我等にお任せを」

「頼むぞ」

こうして彼は一艘の舟ですぐに局と帝がいる岸壁に向かった。そしてそこにいたのだ。

「何っ、御主は！」

「知盛殿であるな」

「九郎判官、貴殿が何故ここに……いや」

岸壁にいたのは義経であった。彼は帝をその手に抱き知盛の前に立っていた。後ろには局もいた。

「帝はこの通りだ。御無事だ」

「そうか。しかし」

「貴殿の考えはわかっていた」

知盛が言う前に義経から言ってきた。

「それは既にな」

「そうか、流石だ」

知盛もイアの言葉でわかったのだった。

「流石は九郎判官義経だ。しかし」

だがそれでもだった。彼は戦うつもりだった。その顔に口惜しさを見せながらそれでもだった。血が滲んでいる顔をあげその手の刀を構えるのだった。

第四章

「平家一門の怨みの刃」

憎しみに満ちた目で義経にじりじりと近寄りながら構えていた。

「受けるのだ！」

その方ナで義経を切らんとする。しかしここで帝が声をあげられた。

「待つのだ、知盛」

「帝……」

「義経は余を助けてくれたのだ」

帝が仰るのはこのことだった。

「今まさに死のうとする余をだ」

「それは……」

「その義経を仇に思わないでくれ」

動きを止めてしまった知盛にさらに言われる。

「これまで守ってくれたそなたが。よいな」

「帝……」

知盛は最早動けなかった。これまで我が子の如く慈しみ守ってきた帝の御言葉だからだ。そしてその彼の側では。帝を御守りできなかったことと遂に仇を取れなかった平家の無念を知りすすり泣く局がいた。

局はいたたまれなくなった。平家の因果、そしてそれが他ならぬ帝を苦しめていることに気付き。それに耐えられなくなった彼女は懷から小柄を出した。そしてそれを己の胸に刺したのだった。

「局！」

「知盛様、私はもう」

すぐに自分に駆け寄って抱き寄せてきた知盛に対して今にも消えそうな声で言うのだった。

「これで」

「馬鹿な、何故だ」

「私は。今まで帝を御守りしてきたつもりでした」
自分ではそうなのだった。しかしであった。

「ですがそれは違いました」

「違っていたというのか。それは」

「私は。帝を苦しめていました」

このことを知盛に対して話す。

「因果で」

「因果・・・」

「私は滅ぶべきでした。壇ノ浦で」

「それではわしもか」

「それは・・・」

流石にその言葉に答えることはできなかった。滅ぶのは自分だけでいいと思っていたからだ。しかしそれは違っていたのである。

「そうだな。我等は滅ぶべきだったのだ」

知盛もここで遂に悟ったのだった。

「壇ノ浦で」

「そうすれば帝の御心を悩ませることもありませんでした」

「そうだな。全ては我等の罪のせい」

知盛は沈痛な顔で局の言葉を受けていた。

「やはり我等は」

「去りましょう」

局の言葉は今消えようとしていた。

「海の中に」

「うむ・・・」

知盛は最後に局の言葉に頷いた。局はそれを見届けると静かに目を閉じ息絶えた。知盛はそれを見届けると己の兵達を集めた。そうして彼等に残っていた僅かな金を渡し去らせた。それと共に碇を持って来させ岸壁でその綱を己に括りつけたのだった。

「何をされるおつもりか」

「知れたこと。わしもまた去るのだ」

己の後ろにいる義経に対して告げるのだった。

「海の中にな」

「左様か」

「行くがいい。最早わしは追うことはない」

そして彼にこうも告げた。

「帝のことは。頼んだぞ」

「わかった、この義経の命にかえてもな」

武士と武士の言葉だった。そこには偽りも欺きもなかった。心と心の言葉であった。

「帝は御守りする。安心してくれ」

「かたじけない。ではわしはこれで去る」

遂に碇の綱を捲き終えた。そうしてその碇を両手で高々と掲げ。

そのうえで海に向かって投げた。綱がそのまま海の中に入っていく。

そして最後に自分が海に飛び込む。その時最後に彼は言った。

「これも我等が罪の報い。ならばそれを受けよう」

知盛は海の中に消えてしまった。後には荒れ狂う海が残っているだけだった。義経は一人それを見届けていた。だが彼の消えた後で一礼しそのうえで岸壁を去るのだった。後には何も残っていなかった。ただ儚さだけを残して。

碇知盛

（義経千本桜より）

完

2009・5・14

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5708h/>

碓知盛 ～義経千本桜より～

2010年10月8日15時04分発行